

第七回世界俳句協会大会メデジン

The 7th World Haiku Association Conference Medellin

Ban'ya NATSUISHI

夏石 番矢

日本とは地球のほぼ裏側にあたる南米コロンビアを、二〇一一年の国際詩祭参加後再び訪れ、予想を超える俳句創作への情熱に驚き、喜んでいる。

二〇一三年九月十三日から十五日まで開かれた、第七回世界俳句協会大会メデジン参加を成功裏に終えた。日本からの参加者は、鎌倉佐弓、栗野賢太郎と私の三人。

世界俳句協会は、二〇〇〇年にスロヴェニアで創立され、その後二〇〇三年から隔年で大会を開き、ブルガリア、リトアニアなどのヨーロッパ以外では、二〇〇三年は天理、二〇〇七年と二〇一一年は東京に会場を設けた。

今回は南米初開催で、欧米や日本とは異質の文化環境。コロンビアのメデジン市ベレン図書館公園講堂がメイン会場。この会場は中心に四角い池があり、日本の寝殿造りをモデルに設計されている。開会では、コロンビア政府、メデジン市の関係者の挨拶に加え、現地日本大使館参事官松本勝弘による俳句の現代に対する言及があった。

大会主催は、コロンビア会員のファン・フェリペ・ハラミッジョ。医者かつ日本精神文化研究者。世界俳句協会大会の定番通り、各国からの講演、参加者による俳句朗読、共同討議が、開催国の第一言語であるスペイン語を中軸に、

英語、日本語同時通訳も動員。参加者の大半を占めるコロンビア詩人に、日本、米国、リトアニアの五人が合流し、合計四か国約百名が、二日半の日程を濃密に共有した。

今回はスペイン語による第一回メデジン市俳句コンテストが併催され、コロンビアに限らず、スペイン語圏の中南米諸国やスペインなどのヨーロッパからの多くの投句があった応募俳句部門第一位は、メデジン市在住の俳句を愛する詩人による次の一句。単純さと深みと暗示性のある秀作。

これ壺

こんなに空虚でいつばい

夜のように

ラウル・オルティス

賞品として世界俳句協会から、夏石の日本語・スペイン語の色紙や出版物を贈呈したら、喜びをはばかりことなく表してくれた。

コンテストに、句集部門があるとは、現地ではじめて知る。スペイン語による句集出版が、ここまで盛んになっている。この部門の第一位は、スペインのスサナ・ベネットの個人句集『突風』（私家版）。

マルハナ蜂

水晶の一面に

他の面に猫

肉屋

声のあいまに斧

骨を割る

季語や五・七・五にとらわれていないが、立派に俳句的表現方法を示す堅実な句集。

私の基調講演では、メデジン市の美しい自然環境に触れたのち、ノーベル賞受賞者のメキシコ詩人オクタビオ・パスの俳句に近い三行詩「遠い隣人」

昨晩トネリコの木
何か言おうとして
やめた

の特色、コロンビア代表詩人ラウル・エナオの秀句

ワイヤーに洗濯物
風に踊る
小さい黒人女髪振り乱す

の魅力、松尾芭蕉の「古池や」の前衛性などに触れ、スペイン語俳句の豊饒な可能性を鼓舞した。

コロンビア詩人による討議「コロンビアとラテン・アメリカの俳句」では、スペイン語俳句の創始者、メキシコ詩人ホセ・ファン・タブラダが、日本を訪れたかどうかに対する疑義が、グスターボ・アドルフ・ガルセスから出され、会場が静まる一瞬があった。タブラダは、日本に滞在していたとしても、日本の俳句や俳人と直接接触を持たず、古典俳句の英訳や仏訳のみに親しんだ。それでも、スペイン語文学に、俳句に近い短詩への突破口を開いた功績は残る。「鳥小屋」と題された彼の三行詩は、詩集『ある日』（二一九九年）に収録されている。

同時にさまざまな歌

鳥小屋の音楽は
バベルの塔

俳句出版プレゼンテーションは、『世界俳句二〇一二年第八号』（七月堂、日本、二〇一二年）、『世界俳句二〇一三年第九号』（七月堂、日本、二〇一三年）を筆頭に個人句集が続く。二年前のメデジンで作られた、

石の上の時間の檻に夢を置く

を収める、夏石のスペイン語を含む三言語版句集『ブラックカード』（サイバーウィット・ネット社、インド、二〇一三年）。

海に浮く雲はいつでも一人称

などを収録する鎌倉佐弓の同じく三言語版句集『七つの夕日』（同社、二〇一三年）。

コロンビアの科学者で詩人のウンベルト・ハリン・Bの句集『諸存在の噂』（トリンチエラ社、コロンビア、二〇一二年）。そのブラックユーモアの一句、

しゃべりたい

米とわが歯

飢えが突き動かす

参加者全員による最終討議「俳句のローカリズムと普遍性」では、さまざまな質問がコロンビア詩人から出された。たとえば、「世界の出来事を俳句で詠めませんか」との問

いには、「第一次世界大戦の最前線を詠んだフランス語俳句があります」と私が答えた。

米国のチャールズ・トランブルは、日本語以外では五・七・五は適さず、北米俳句は日本の俳句の模倣をやめて、獨創性を追求していると指摘。

俳句朗読は、私が序文を寄せ、ハラミツジヨが編集した、大会のための記念選句集『空壺』（トドグラフィカス社、コロンビア、二〇一三年）から。各作者独自の人間性が肉声によってにじみ出て、世界に広がった俳句の豊かさが味わえ、充実した気分になった。

私のノート
午後一滴ずつ

青い難破

クラウディア・セシリア・トゥルヒツジョ（コロンビア）

他の誰か一步

道が爆発

やがて松葉杖

ルイス・エステバン・バティーニョ・クルス（コロンビア）

雲のない平原の空

わがすべて

神にさらされる

チャールズ・トランブル（米国）

わからない

たった一夜で君

がこの無数の花を編み出したこと

ユリウス・ケレラス（リトニア）

世界の終焉らしい朝湯に浸かる

栗野賢太郎（日本）

庭を見るのに

最高の窓

水晶の蝶

アルバロ・ロベラ（コロンビア）

街の水たまり

わが家

星々に沈む

ルベン・ダリオ・ロテロ・コントレラス（コロンビア）

今回の大会の最大の成果は、スペイン語俳句の純度の高い大きな金の鉱脈に出会ったことである。